

あいさつ表現

中西 太郎

1 調査の目的

出会い時のあいさつ表現の機能のひとつとして、敬語のような、待遇的關係を示す働きがある。例えば、朝、「おはよう」と声をかける相手より「おっす」「おう」「よう」と声をかける相手のほうが親しい相手だということは、容易に知れる。しかし、従来の方言資料・辞書の類の記述は、このような待遇的關係を示す働きを念頭においた記述として十分ではない。例えば、あいさつ言葉の俚言形「オハヨーゴザリス」などの特徴的な表現の記述は見られても、それを家族に言うのか、疎遠な同年代に言うのか、といった待遇的観点での使い分けは知るべくもない。同じ相手に対しても、敬体を用いるか、常体を用いるかといった傾向は地域によって異なる。さらに、例えば、親しい相手には「オハヨー」、疎遠な相手には「オハヨーゴザイマス」と、敬語形式の使い分けにだけ気を付けてさえいれば良いというわけではない。冒頭の例では、同じ常体として括られるものでも、「オハヨー」ではなく、まさしく「オッス」などの表現が相手への待遇的關係把握を示す表現として適切なのである。つまり、あいさつの特徴は、「オハヨー」:「オハヨーゴザイマス」のように、敬語形式の使い分けだけではなく、「オハヨー」:「オー」のように表現内容の差なども、自然な運用に関与している点にあると言える。まして、各地には「コンニチワマダゴワシタ (今日はまだでございました)」などのような地域特有の表現内容のバリエーションがあることが知られており、共通語とは異なる使い分けの実態を持つ可能性がある。その意味でも、自然な運用を期した時の難解さは予測できる。そこで、日本語のあいさつ表現を待遇的観点から記述し、運用に資する資料を整備することが筆者の研究の目的の一つである。

本稿では、南三陸地方の地域別・世代別・場面別の使用実態の特徴を報告する。対象話者については、2世代（高年層・若年層）に及ぶ。これは使用実態の世代差を明らかにするとともに、あいさつ表現使用実態の変化の方向性の考察をも可能にする。よって、記述の中に読み取れる、あいさつ表現変化の方向に関する知見についても合わせて指摘する。

なお、場面については、朝の出会い時のあいさつ表現を扱う。

2 調査地域の特徴

あいさつ表現の使用実態の地域差に加え、待遇的場面ごとの差を捉えた研究は少なく、当該地域もその例に漏れない。そのような状況において、地理的広がりについては、国立国語研究所編(2006)『方言文法全国地図』(以降 GAJ と略)の調査結果が、待遇的場面差については大橋(1997)や本堂(1997)(いずれも方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊』所収)の記述が、当該地域ないし

その周辺の地域の貴重な記述として挙げられる。

まず、GAJ349 図における調査地域の分布を図 1 に示す。朝、近所の目上の人に道で会ったときのあいさつを尋ねた結果である。当調査とは、遠野、釜石、大船渡、気仙沼、志津川の 5 地点が重なっている。

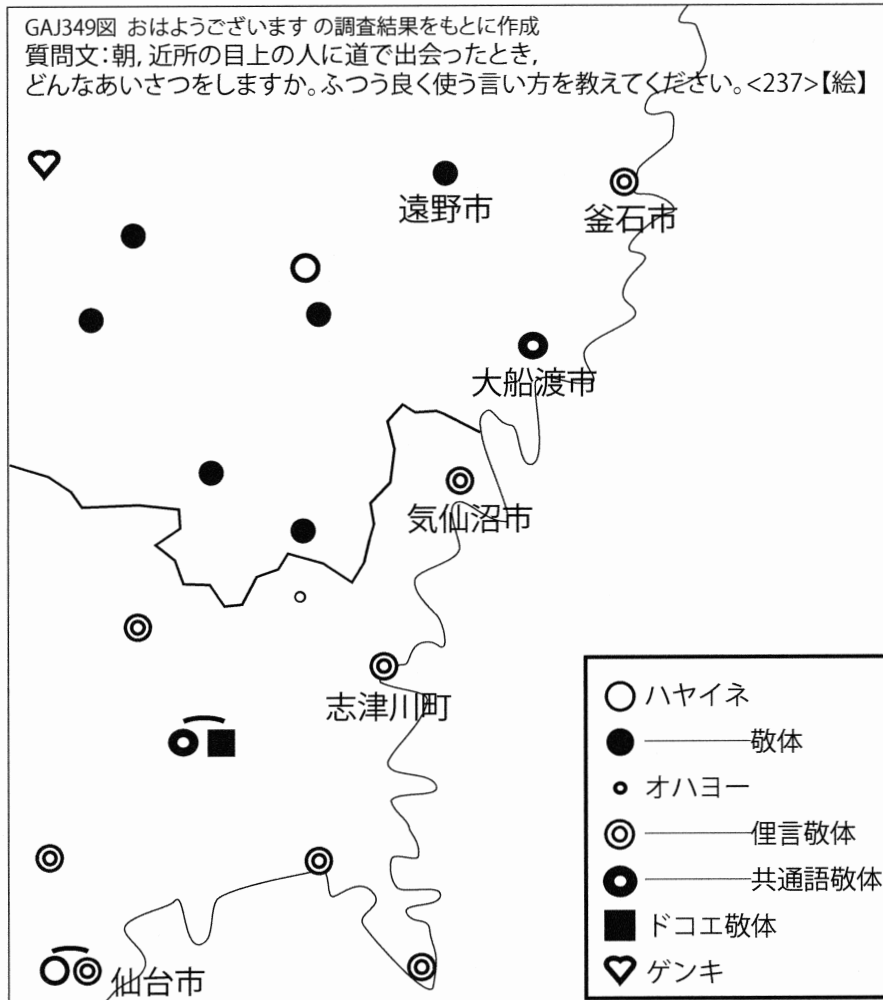


図 1. GAJ349 図における調査地域とその周辺の分布

調査地域の南三陸地方は、岩手県南部方言地域の沿岸部から宮城県の北部海岸部方言の地域にあたる。図 1 を見ると、GAJ の調査が行われた 1980 年前後の様子では、岩手県南部方言地域でも、南三陸地方以外の内陸部にあたる地域には「ハイイネ」類（ハイイネ常体：○、ハイイネ敬体：●、凡例に対応する具体例は次頁に掲載）などが窺える。だが、当調査の対象地域にあたる岩手県南部から宮城県北部の沿岸部には、主に「オハヨー」類(◎●)が分布している。この点から判断すると、概ね定型的表現使用地域だと言ってよいだろう。ただし、GAJ の結果はこの場面に関するものだけであり、例えば同年代に対してなど、他の待遇的場面で、同じように定型的な表現が行われるかどうかや、その使用実態に世代差やより細かい地域差があるかは分からない。

次に、当該地域近辺の代表地点、宮城県宮城郡利府町森郷方言や、岩手県盛岡市方言の待遇表現を記述する中で、あいさつの待遇的場面ごとの使い分けを記述した大橋氏や本堂氏の調査結果を参照する。それによると、盛岡市では「オハヨーゴザンス」と「オハヨーガンス」と「オハヨー」が、相手によって使い分けられている様が窺える。こういった使い分けが盛岡以外の周辺地域でも行われているのであれば、特定の場面のあいさつ表現の内容（盛岡の場合「オハヨー」）と、その地域で行われる敬語形式の待遇的性格を踏まえることで、容易に待遇的側面での使用実態の予測が可能になると言える。ところが一方、利府町では、最も敬意を払うべき相手には、「オハヨーゴザリス／オハエガス」のような「オハヨー」の俚言敬体＋呼称詞（「コーチャーセンセー」など）で呼び掛けるというあいさつが見られる。そして、見知らぬ相手や、顔見知りでも、年上の場合には「あまり声をかけない」とされる。これは、単純な敬語形式の足し引きで自然な運用につながらないことを示唆している。ゆえに、GAJの一場面による把握だけでは、運用を念頭にした記述として十分ではないと捉えられる。当該地域の記述を要する所以である。

3 言語地図化に際しての処理と具体例

調査は、「朝、道端で、【対等よりやや目上の人】に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？」という質問文で行った。そして、待遇的場面による差を把握するため【 】の部分で[最も目上の人（以降「最上」と略）／対等よりやや目上の人（以降「やや上」と略）／同年代の親しい人（以降「同親」と略）／顔見知り程度の同年代の知人（以降「同疎」と略）／目下のもの（以降「目下」と略）／未知の相手（以降「未知」と略）]など、人物を変えて順に質問した。

本稿では、このようにして得られた調査結果を言語地図によって提示する。地理的広がりをつまやくし、南三陸地方内に使用実態の地域差がないか、検証可能な形で提示するためである。

次に、回答の採用方針、記号化の際の分類方針等、地図化の手続きを述べていく。

地図化にあたって、話者が複数名いる地点では、在住歴のもっとも長い1名を選び、その回答を反映させた。なお、誘導で得られた回答、付問で得られた回答、話者が質問場面とは違う状況を想定していた回答などは、自然な回答とみなさず、記号化の対象としなかった。例えば、回答に際して話者が「皆」など、調査文の対象となる相手以外に、他の属性の相手を含む可能性のあるものとして答えた回答、いわば「不特定多数の相手」への表現として捉えられる回答は扱わない、といったものである。

記号化は、待遇的価値に関わると目される要素を重視し、表現内容の差異と敬語形式の差異を重視して行った。ムード・テンスの分化にあたる表現（「ゲンキカ」／「ゲンキダツタカ」）等は、待遇的価値に関わらない限り、等価表現として統一した。また、話者の回答で「天気の話もするなあ」等との情報があっても、具体的発話の例がない場合は、記号化の対象と見なさなかった。表現内容は、その共通性がわかるよう表現内容別に「目覚めの早さ」や「行先尋ね」のような大分類を設け、最終的に、後述のように各分類に記号を割り当てた。

大分類	代表形式	具体例
目覚めの早さ		
	○	ハヤイネ キョーワハヤイナヤ／ハエーナー／ハヤカッターナー／ハヤイネー
	●	敬体 ハエーナムス／オハヤガス
	◦	オハヨー オハヨー
	◎	俚言敬体 オハヨーガンス／オハヨーゴザリス／オハヨーゴザリヤス／オハヨーゴザンス
	⦿	共通語敬体 オハヨーゴザイマス／ドモオハヨーゴザイマス
天気		
	☀	天気 キョーアメフリダネー／アツクナリソーダネ
	☀	敬体 キョーワテンキガイデスネー／キョーワイーテンキダナンス
行先尋ね		
	□	ドコエ ドツツノホー／ドゴサイグンダベ／ドゴサイグベー／ドサイグンダイ
	■	敬体 ドゴサイグノッス／ドチラサネス／イマカラドコニクトコデスカ
様子伺い		
	◇	ナニシテイルカ イマナニヤッテンノヤ／ナニシテタ／キョーナニスル
	◆	敬体 キョーナニシニキタンデスカ／キョーワナンノシゴトデスカ
調子伺い		
	♥	ゲンキ? キョーモゲンキデネ／チョーシワ／ゲンキカ／ダイジョブダ
	♥	敬体 カワリナイスカー／キョーノカラダノチョーシワドーナスカ／ゲンチッスカ
再会		
	☾	オヒサシプリ シバラグダッタネ／シバラクブリダネ
	☾	敬体 オヒサシプリデシタ／シバラクデシタ
慰労・謝意		
	+	オツカレサマ ゴクローサンダネ
	☺	一生懸命 イツモオカセギダゴド
実質的な内容を持つ表現		
	◇	実質的表現 ソロソロアガンネェ／ユーベネラレネガッタネ
	◆	敬体 ツリコスカ／イヤイヤイヤコノアイダゴチソーニナリマシテ
呼びかけ類		
	△	呼びかけ オー／オーイ／オッス／チース／ドモ／ホーイ／ヨー
	▲	名前 名前を呼ぶ
その他		
	☆	コンニチワ コンニツワ
動作		
	✕	お辞儀など 会釈／頭を下げる
	☺	手を振るなど 手を振る／手を上げる
何もしない	✕	
無回答	N	該当する相手がいない、などの理由

プロットするにあたって、複数の構成要素から表現が成り立つものや、複数語形の回答は並列して地図に表した。

例. オー、ゲンキカ = △♥

4 南三陸地方高年層のあいさつ表現の分布

4.1 最も目上の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

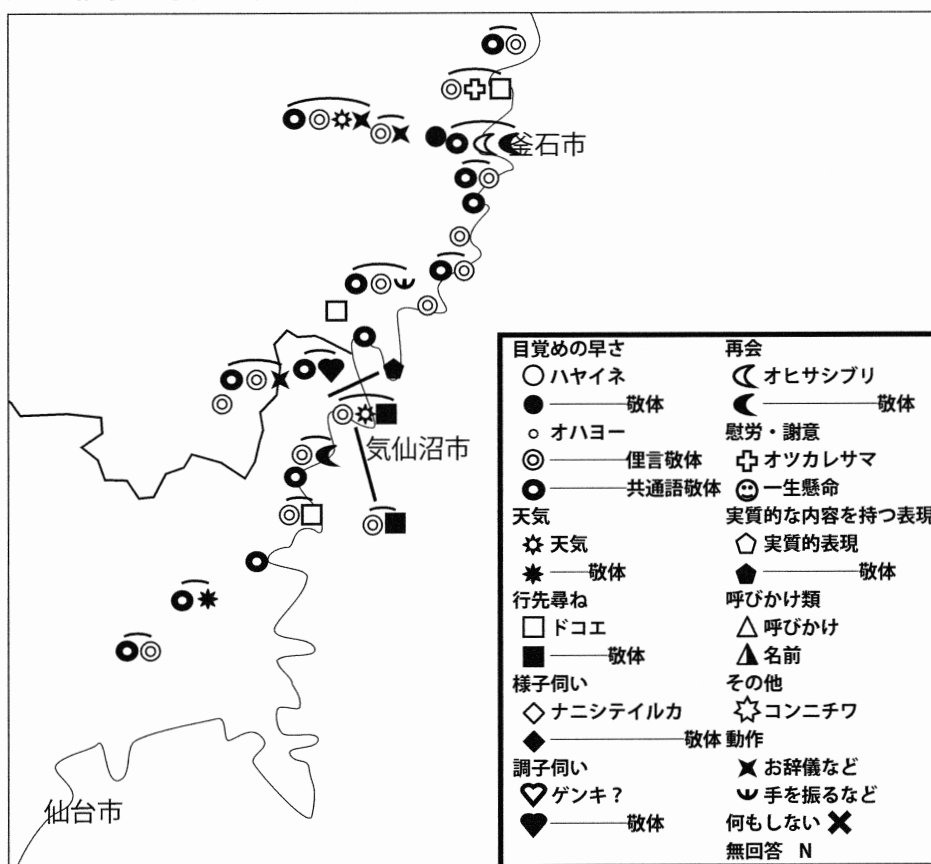


図2. 最も目上の相手に対するあいさつ表現の分布

図2は朝、最も目上の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。まず分布を見て、過去の調査結果との比較で気づくことは、得られた表現の種類数が全体的に多いということである。この点については、質問文の違いによる影響と見る配慮が必要である。本稿の質問文と先行研究の質問文は、「朝、道端で」という点は概ね変わらない。だが、その後続く質問文で、GAJの質問と『方言資料叢刊』の質問では、「どんな“あいさつ”をしますか／どのように挨拶しますか」という尋ね方をしている。それに対し当調査では、「何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか」という尋ね方をしている。前者は、あいさつ言葉の典型を引き出すような質問だと言え、後者は、自然な言語行動を引き出すような質問だと言える。筆者の目的は運用を視野に入れた記述であるため、このような自然な言語行動を引き出すような調査質問文が目的に適しているといえる。ただし、GAJ・『方言資料叢刊』の調査と当調査が、全く質の異なるものを取り出してきたかといえば、そうではない。当調査の結果にも、GAJ調査の質問で典型として引き出された「オハヨー」類が窺えることから、当調査の質問が、GAJ調査の質問を包括するような性格の質問だと言えるまでである。

図2の、最も目上の相手に対する表現では、全体に目覚めの早さの表現が多い。ただし、共通語

形「オハヨーゴザイマス」(●)も多いが(14地点)、「オハヨーゴザリス」などの俚言形(◎)も盛んにおこなわれているのが見て取れる(16地点)。具体的に得られた俚言形は、以下の通り。

オハガンス、オハヤスー、オハヨガンス、オハヨゴザリス、オハヨーザイマース、オハヨーガス、オハヨーガンス、オハヨーゴザリス、オハヨーゴザリヤス、オハヨーゴザリヤシタ、オハヨーゴザンス

俚言形が根強く使用されていると判断できる。宮城県の北西部の小牛田から山形県の北東部新庄をつなぐ陸羽東線沿線地域のあいさつ表現の使用実態をグロットグラムによって調査した中西(2011c)では、同じ高年層の最も目上の相手に出会った時の場面で、俚言形を用いるのが22地点中わずか3地点であり、それに比べると、この南三陸地方での俚言形の使用比率の高さが分かる。

また、気仙沼市周辺に「ドコエ」と尋ねる表現(□■)がまとまっており(4地点)、注目に値する。これらは、全国的なあいさつの表現分布から看取される通時的変遷過程(三井2007他)、

(1a)イーテンキダ類、ドコエイクカ類、デカケルカ類 > b)ハイネ類 > c)オハヨー類

に照らし合わせると、(1a)の古態と目される表現にあたる。加えて、洞泉には「ハエーナムス」という、通時的変遷過程では(1b)に属する、「オハヨー」の前身とされる「ハイネ」類(●)の表現が見られる。これらを考え合わせれば、南三陸地方の最も目上に対する場面では、定型的表現である「オハヨー」類を用いながらも、一部の地域であいさつ表現使用実態の古態の特徴を留めている可能性が考えられる。ただしこの点は、他場面の分布の様子と合わせ総合的に判断する必要がある。注目すべき点を以下にまとめる。

- ・GAJ349図の分布に比して用いられる表現のバリエーションが多い。
(常体・敬体の異なりも含めて14種)
- ・「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布(14地点)。
- ・「オハヨー」俚言敬体が多く、ほぼ全域に分布(16地点)。
- ・気仙沼周辺に「ドコエ」等、非定型表現が相対的に多い。

4.2 やや目上の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

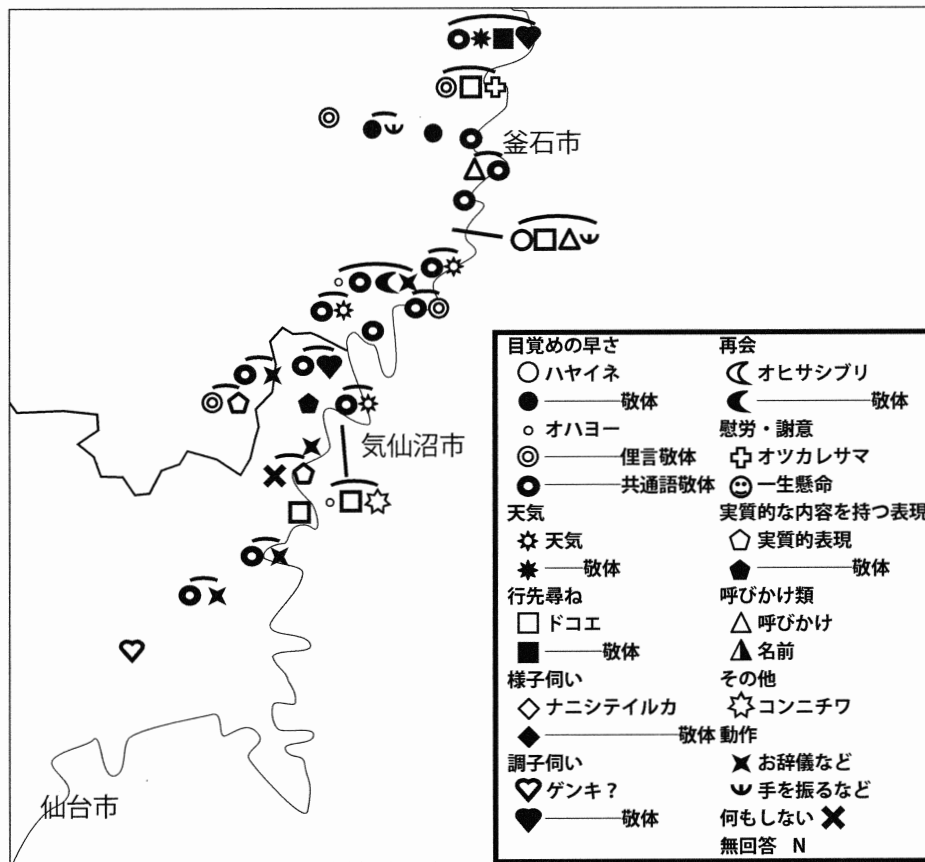


図 3. やや目上の相手に対するあいさつ表現の分布

図 3 は朝、やや目上の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。特徴的なのは、前節の最も目上の相手に対する分布に比べて、「オハヨー」俚言敬体が少なくなっていることである（最上：16 地点、やや上：4 地点）。その形態も「オハヨーガス、オハヨーガンズ、オハヨーゴザンス」の 3 種に限られる。最も目上の相手に比して、やや目上の相手で「オハヨー」俚言敬体が少なくなるという点は、陸羽東線沿線地域の傾向と一致する（陸羽東線最上：4/22 地点、やや上：2/22 地点）。「オハヨー」俚言敬体の待遇価値が高いという意識は、これらの地域に共通する傾向と読める。一方、「オハヨー」共通語敬体は、気仙沼市以北の海岸沿いに目立って分布する（14 地点）。その使用比率は、最も目上の相手へ用いる割合と変わらない（最上＝やや上：14 地点）。当該地域で「オハヨー」共通語敬体は、「オハヨー」俚言敬体に比べ、少なくとも最も目上からやや目上まで、広く用いることができる待遇価の表現として意識されていると言える。

また、気仙沼市の周辺や釜石市の周辺に、天気を話題にする(☆★)表現や、「ドコエ」と聞く行先尋ねの表現、「ユーベネラレネガッタネ」など、実質的内容(△◆)を話す表現が併せて少なからず見られる（「ドコエ」類：5 地点、「実質的表現」類：3 地点）。「ハヤイネ」類(○●)も最も目上よりも数を増やしている（最上：1 地点、やや上：3 地点）。先の、最も目上の相手への表現の分布から分かる使用実態と同じで、一部の地域で、あいさつ表現使用実態の古態の可能性がある特徴を示して

いると考えられる。このような非定型表現の使用率は、最も目上の相手への場面に比して高い（最上：12地点、やや上：15地点）。

なお、常体・敬体の使い分けという点では、やや目上の相手でも、「ドゴサイグ」のように常体で声をかけるという地点が目立つ。「オハヨー」類に関しても、「オハヨー」常体(○)がやや目上に対して用いられている点が興味深い(2地点)。常体形の使用率という点では、陸羽東線沿線地域に比して、南三陸地方の方が若干高く(南三陸：11/26地点、陸羽東線：8/22地点)、あいさつ表現における敬語使用への寛容さもこの地域の特徴としてよいかもかもしれない。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布。(14地点)。
- ・「オハヨー」俚言敬体が最も目上の相手に比して少ない(4地点)。
- ・最も目上に比して非定型表現を使用する地域が若干多い(「ドコエ」類：5地点、「実質的表現」類：3地点、「ハヤイネ」類：3地点等)。
- ・常体形の使用が多い(11/26地点)。

4.3 顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布の特徴

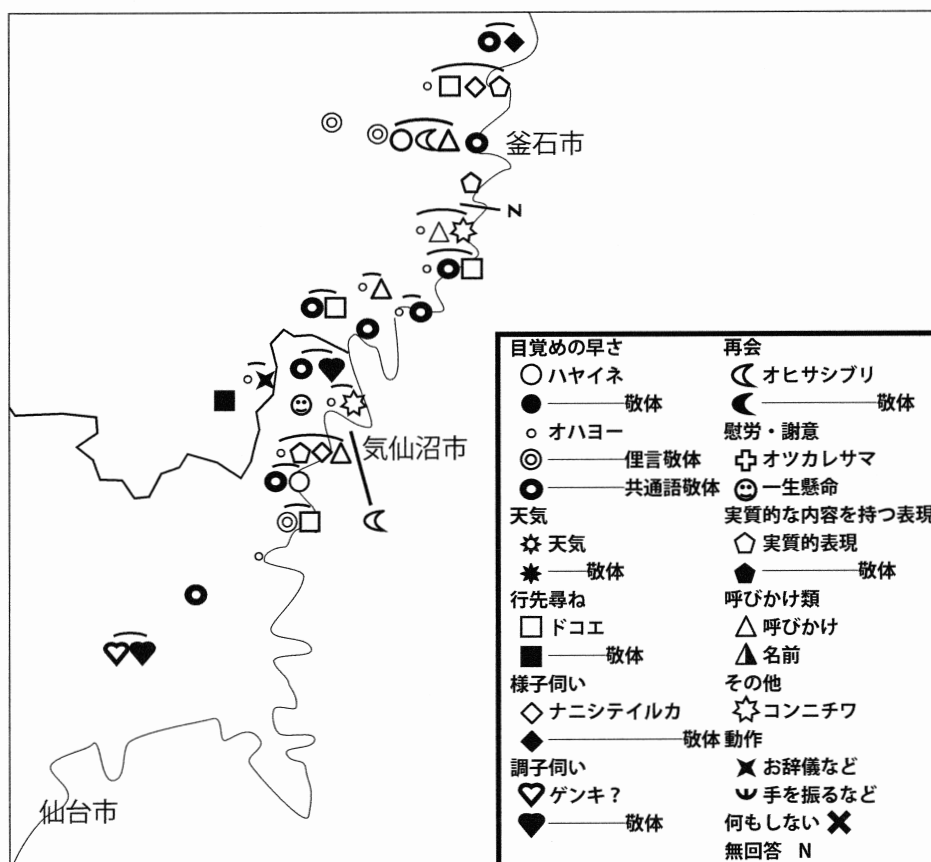


図4. 顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布

図4は朝、顔見知り程度の同年代の知人に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

これまでの2場面比べ、全体的に、まとまった分布を示すものが少ない。最も数の多い「オハヨー」常体、「オハヨー」敬体でも、ともに9地点である。それに次いで行先尋ね（常体：4地点、敬体：1地点）、以下様々な表現が見られる。また、常体・敬体の使い分けという点では、例えば「オハヨー」などは、同一表現内容で敬体と常体の分布がほぼ半々であり、あいさつ表現上でどう待遇すべきかばらつきがあることが窺える。特に、越喜来、綾里で、「オハヨー」常体と敬体の2形態が表れている様子が象徴しているように、当該地域では、顔見知り程度の人に対する対応の仕方は定まり切っていない可能性が窺える。なお、ここで現れる「オハヨー」俚言敬体は「オハガンス、オハヨーゴザリス、オハヨーゴザンス」の3種である。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・全体としてまとまった分布を示すものが少ない。
- ・非定型表現のバリエーションが多い(10種)。

4.4 親しい同年代に対するあいさつ表現の分布の特徴

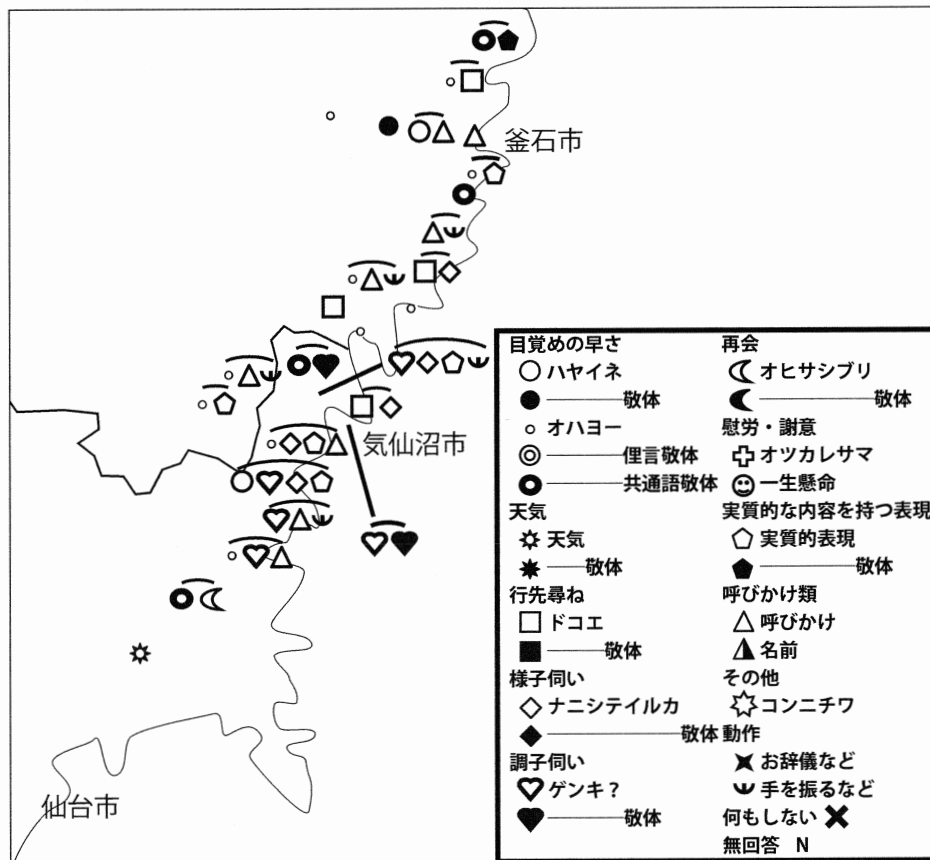


図5. 親しい同年代に対するあいさつ表現の分布

図5は朝、親しい同年代に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

「オハヨー」常体で、簡潔に済ませることが多いようである(10地点)。しかし、より注目すべき点は「オハヨー」類を用いない地点の多さである。「オハヨー」類がない地点は12地点存在する。これは、陸羽東線沿線地域の「オハヨー」類がない地点に比べてはるかに多い(陸羽東線:3/22地点)。つまり、親しい同年代に対して「オハヨー」類の表現が浸透しているか否かの点で、2地域には顕著な差が見られるのである。

また、場面間で比較しても、行先尋ねや様子伺い、調子伺いなどの非定型表現が、それぞれある程度多く窺える。特に気仙沼市周辺には「ゲンキカー」と尋ねる調子伺い(♡♡)や「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を持つ表現が多い。なお、調子伺いの表現は、他場面まで見ても、この同年代の親しい相手への場面における気仙沼市周辺の分布が、まとまった分布として際立っている。その意味で、南三陸地方の中での地域的特徴と認めてよいだろう。

そして、気仙沼市周辺の非定型表現を交わす地点の中には、「オハヨー」類を併用していない地点もわずかながら見られる点も注目に値する。なぜなら、ここにあいさつ表現の使用実態の複雑さが窺えるからである。先に見たように、最も目上や、やや目上の相手の場面では、非定型表現が用いられているとしても、ほぼ「オハヨー」類(特に敬体)を併用するという使用実態が見られた。その様子から、例えば親しい同年代の相手には、「オハヨー」の常体さえ用いれば、適切なあいさつ表現の運用が可能になるという解釈が予見されるだろう。だが、実際には、図5の場面の分布中には「オハヨー」を併用していない地点もある。すなわち、そういった地点では、例えば、最も目上・やや目上=オハヨーゴザイマス/親しい同年代=ゲンキカのように表現内容を変えて声をかけることが適切なのだと考えられる。すなわち、あいさつ表現の待遇的使い分けに、表現内容への配慮が積極的に関与すると解釈できるのである。これは、南三陸地方の中に、多数とは言えないものの、大橋(1997)の結果からも示唆されるような、単純な敬語形式の足し引きでは自然な運用につながらない地点があることを意味している。このような事実からも、あいさつ表現使用実態の記述は、待遇的側面で単一の場面では十分ではないということが示唆される。

最後に、地域的偏りは少ないが、「オー」「オッス」「ヨー」など、呼びかけの表現(△)も、8地点と広く、一定数分布していることも指摘しておく。これは、陸羽東線沿線地域や、秋田県・青森県調査の同場面でも一定の数が認められ、親しい同年代などの気安い相手に対して通底して用いられる表現と言えるかもしれない。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・気仙沼周辺に非定型表現がやや多い(「ドコエ」類:2地点、「ナニシテイルカ」類:3地点、「ゲンキ?」類:6地点、「実質的表現」類4地点)。
- ・「オハヨー」類はほぼ全域に広がるが、気仙沼周辺に分布が少ない。
- ・呼びかけの表現がやや多い(8地点)。

4.5 目下の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

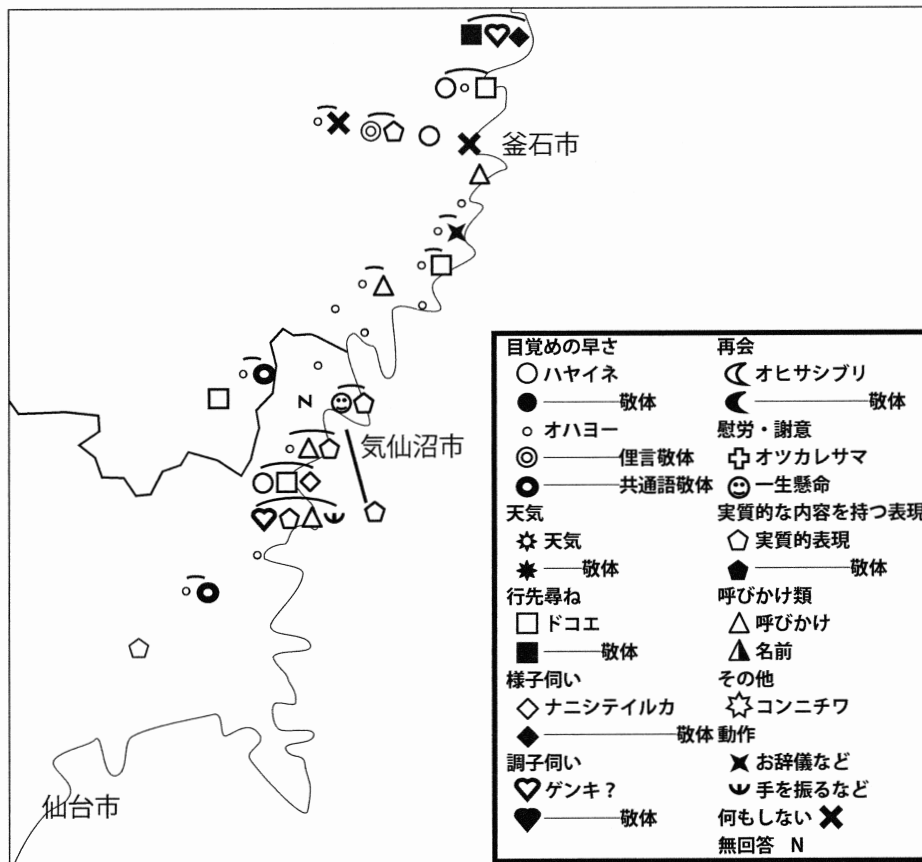


図 6. 目下の相手に対するあいさつ表現の分布

図 6 は朝、目下の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

こちらは、親しい同年代への表現以上に「オハヨー」常体の分布が顕著である（14 地点）。しかも、唐丹、綾里、小友、矢作、鹿折、志津川は「オハヨー」常体のみであり、簡素な声掛けで済ますことがわかる。また、簡素という点では、例えば、千厩の「ドゴサイグノ」というのも、表現内容こそ違いますが 1 要素で簡素と言える。同様に、吉浜の「(ちょっと頭を下げて) オハヨー」というのも実質的な発話は 1 要素となる。このように、簡略な発話を交わすと判断できる地点を列挙すると、遠野、洞泉、平田、大島、千厩、折壁、柳津、前谷地も加わり、14 地点となる。目下への声かけは、比較的簡素に済ます様子が分かる。

また、気仙沼周辺に分布が目立つ実質的表現では「オメ イマ ナニ ブガツ ヤッテンダ (お前今何部活やっているんだ)」や「オマエ〜ノ ムスコ ダッタ ナー。オヤジ ナニ シテル。」と極めて気安く声をかけている様子がうかがえる。

さらに「何もしない」が 2 地点見られるが「(かけないでいて自然に声をかけてもらうことになる。)」という補足から、相手が声をかけてくるのを待つ、目下から声をかけるのが普通という意識があることもわかる。この点については、筆者が以前に行った出会いの言語行動の使用実態調査（調査地は仙台、詳細は中西 2005 他掲載）の結果と比べると重要な意味を持つ。24 時間の出会い時の

言語行動を、逐一具に記録した出会いの言語行動の使用実態では、年代に関わらず、被調査者が積極的に自分から声をかけるという声かけ順の実態が得られた。つまり、目下の相手に対して、こちらから声をかけるという意識を持っていたということである。この差は、個人差、あるいは意識を問うた当調査と実態を問うた言語行動調査の、行動意識と使用実態のずれという可能性も考えられるが、一方で、声かけの先後についての規範の地域差を反映したものという可能性も考えられる。そうだとすれば、適切なあいさつ表現の運用に関わる待遇的要素として、声かけの先後という点にも注目する必要があるかもしれない。こういった点の解明も、今後求められるあいさつ表現研究の課題と言える。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・「オハヨー」常体が多く、ほぼ全域に分布（14地点）。
- ・発話要素が少ない簡素な声かけを行う地点が多い（実質1発話要素：14地点）。

4.6 未知の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

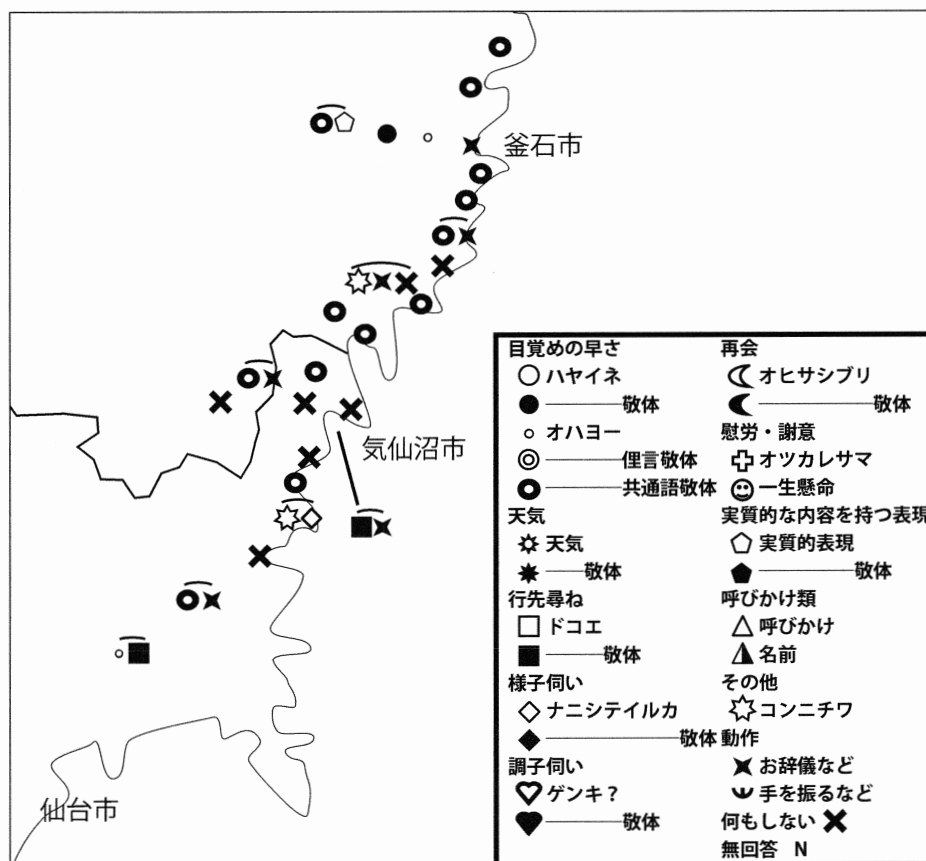


図7. 未知の相手に対するあいさつ表現の分布

図7は朝、未知の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

「オハヨー」共通語敬体が極めて多い(13地点)。気仙沼市中心部やその近辺など、都市部では比

較的声をかけないような向きも見える。また、歌津に「コンヌヅワ（こんにちは）」(☆)が表れている点が興味深い。昼のあいさつと考えられる「コンニチワ」が、こうして朝の場面で見られるのは、一見、被調査者が調査場面の解釈を誤って答えているかのように見えるが、調査時の様子を踏まえるとその可能性は少ない。その使用の背景には、「コンニチワ」の昼の表現としての性格よりも、「疎」の相手への距離感を示すという待遇的性格を重視したということが考えられる。同じく「疎」の相手と捉えられる図4の場面においても「コンニチワ」が見られることがそれを裏付けている。このように、あいさつ表現の使用実態を記述する際には、あるあいさつ表現は、典型的な場面に用いられるばかりでなく、その待遇的性格を示すことに重心を置くなどして、非典型的な場面でも現われ得るという事実を見過ごしてはならない。本来、“相手の来し方が早い”様子を指して用いられていた目覚めの早さの表現が、現在、漠然と朝の出会い時に用いられる「オハヨー」類につながっていったように、非典型的な場面での用法を介して中心的機能を変化させることは考えられる（中西2008a）。その際、重要なのはその背景にある使用の要因を捉えることである。そのためにも、先入観を持たずに正確な使用実態を捉える必要がある。

また、「何もしない」(✕)や「オハヨー」共通語敬体の単体回答に象徴されるように、未知の相手へは、既知の相手ほど積極的に声をかけず、声をかけるとしたら、定型的なあいさつ一言で済ませるという傾向が窺える。

- ・「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布（13地点）。
- ・非定型表現はほとんど用いない。
- ・気仙沼周辺では「何もしない」が多く分布（7地点）。

4.7 南三陸地方高年層のあいさつ表現の使用パターン

以上、本節では、南三陸地方の高年層の使用実態を分布の面から見てきた。なお、場面毎の使用実態を通観した結果、南三陸地方の中に、全場面に渡って特有の使用実態を示す地域は見られなかったことから、当該地域の使用実態のまとめにあたっては、南三陸地方全体を総合したものを提示する。当該地域の使い分けの実態は表1のようにまとめられる。

表1. 南三陸地方・高年層のあいさつ表現の使い分け

相手	主なバリエーション
最も目上	オハヨー俚言敬体、オハヨー共通語敬体
やや目上	オハヨー共通語敬体
顔見知り程度の同年代	オハヨー共通語敬体、オハヨー常体
親しい同年代	オハヨー常体、調子伺い常体、 実質的表現常体、呼びかけ類
目下のもの	オハヨー常体
未知の相手	オハヨー共通語敬体、何もしない

特に注目すべき点は、同年代の親しい相手に対して、定型的な表現である「オハヨー」類を用い

ない地点の多さである。そういった地域では、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を交わすことが多いということが分かった。

これまで、これらの地域では、GAJ349 図においては「オハヨー」類に覆われ、『方言資料叢刊』の代表地点における使い分けの実態でも、「オハヨー」の使い分けが示されていた。そこから、さも「オハヨー」常体と「オハヨー」敬体の組み合わせで、地域のあいさつが充足しているように感じさせられてきた。しかし、当調査の調査結果により、同じ県内でも、地域が変われば、使用実態も異なり、必ずしも「オハヨー」類だけで地域の出会い時の声かけが充足しているわけではないことが明らかになったと言える。

5 南三陸地方若年層のあいさつ表現の分布

本節では、第一に、気仙沼を中心とした近隣地域までの、若年層の朝の出会いのあいさつ表現の使用実態を明らかにする。また、若年層の使用実態を明らかにすることで、当該地域のあいさつ表現の変化の方向についての知見を得ることも、付帯して解明すべき問題である。

特に、後者の問題意識については、次に述べるような点の解明に重心が置かれる。

前節まで行った南三陸地方の高年層における朝の出会いのあいさつ表現の使用実態では、「オハヨーゴザリス」等の俚言形のあいさつ表現が最も目上の相手に顕著に用いられ、俚言形によって待遇的使い分けを行っている可能性も窺うことができた。それでは、当該地域の他の世代は、このような使用実態の特徴を保持しているのかといった疑問が浮かんでくる。近年急激に進行する共通語化の流れで、同地域でも若年層は方言形を話すことができないといった現状が各地に存在する。仮に当該地域のあいさつ表現においても共通語化が進んでいるとすれば、「オハヨーゴザリス」という俚言形に代わるような表現を用いているのか、あるいは最も目上とやや目上に同じ表現を用いるというように使い分けの使用実態そのものが変わっているのかという点が、興味深い問題と言える。

このような目的で、本節では、気仙沼を中心とした近隣地域までの、若年層の朝の出会いのあいさつ表現の使用実態を明らかにする。なお、若年層については、気仙沼市を中心にして、高年層よりも狭域を調査地域に定めたため、まず具体的な調査地点を以下に掲げる。

調査地点：大船渡、小友、矢作、唐桑、気仙沼、千厩、折壁、大谷海岸、本吉、歌津、志津川、柳津（計 12 地点、若年層の調査地点のうち、鹿折はあいさつ調査項目が欠落しているため、以降で地図上にはプロットしない。）

5.1 最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布の特徴

若年層の調査結果の分布の特徴を待遇的場面ごとに概観すると、いくつかの場面の分布が、極めて似たパターンを示すものとして括られることが分かった。そこで、まずは似たパターンとして一括りにできる、最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対する表現の分布を次頁に示す。

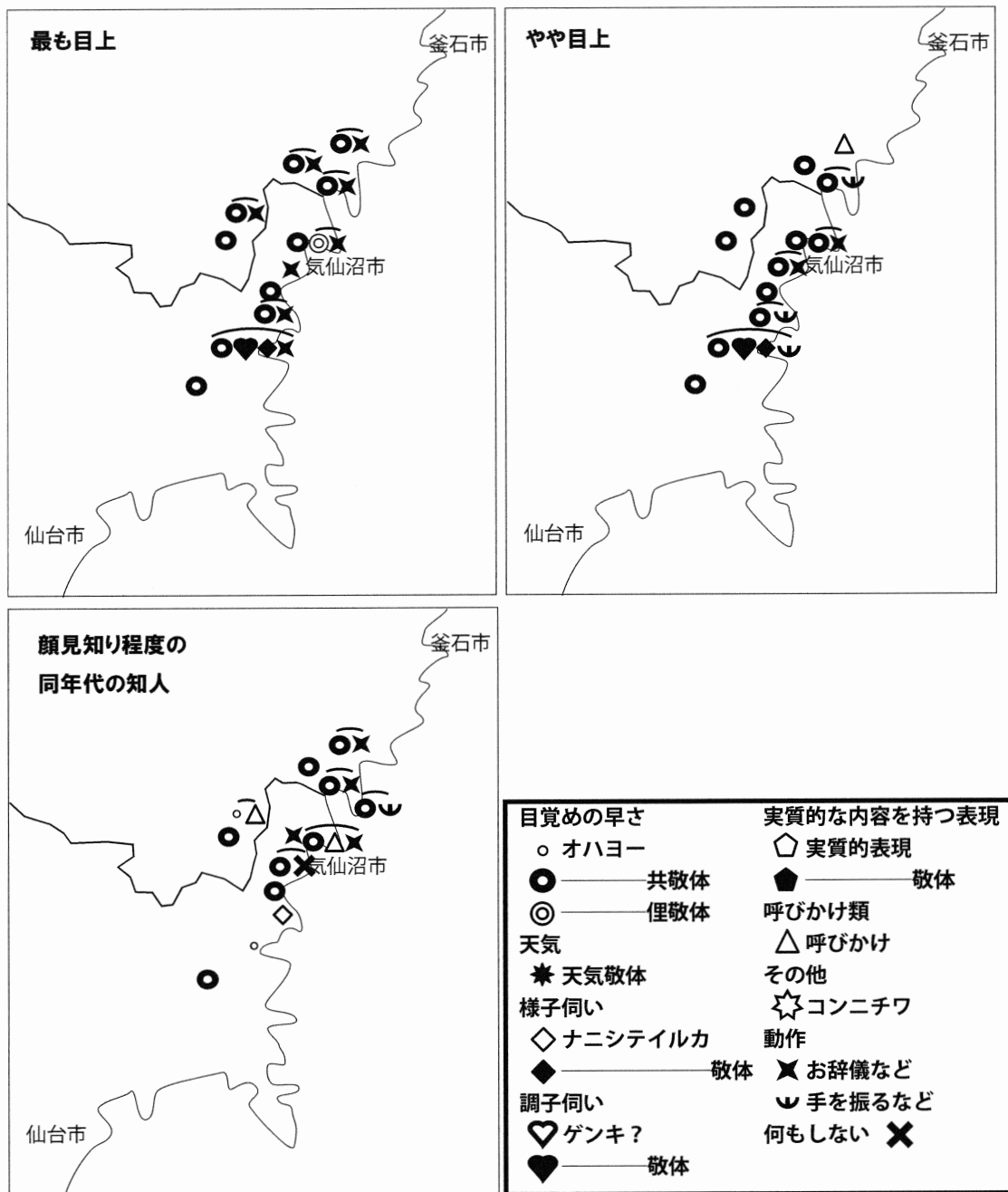


図 8. 最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布

図 8 はそれぞれ、南三陸地方の若年層話者が、朝、最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。左上図が最も目上、右上図がやや目上、左下図が顔見知り程度の同年代の知人に対するものである。

これらの相手に対する対応の仕方はほぼ一様で、「オハヨー」共通語敬体、あるいはそれに動作としての「お辞儀」(✕)を併用する、とまとめられる。表現バリエーションの種類も高年層に比べると極めて少なく、定型的なあいさつを交わすことが多いと判断できる。顔見知り程度の同年代の知人に対しては「オハヨー」常体を用いることもあるが、全体からすると極めて少数である。

5.2 親しい同年代・目下のものに対するあいさつ表現の分布の特徴

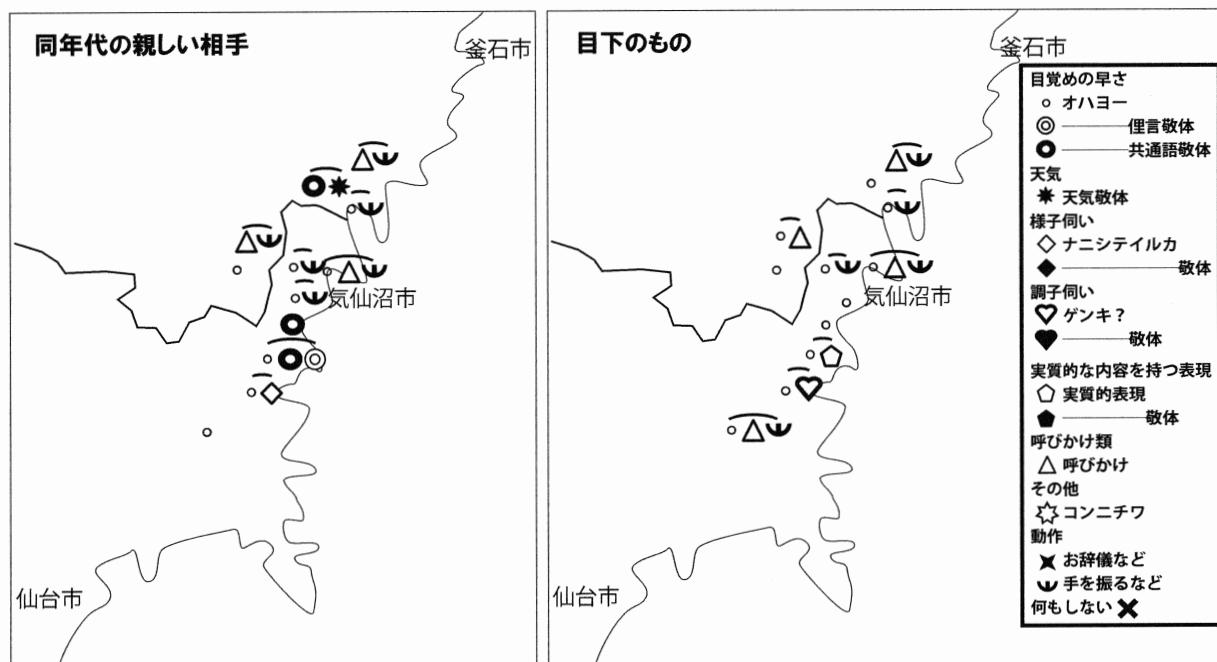


図9. 親しい同年代・目下の相手に対するあいさつ表現の分布

図9はそれぞれ、南三陸地方の若年層話者が、朝、親しい同年代・目下の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。左図が親しい同年代、右図が目下の相手に対するものである。

ほぼ「オハヨー」常体が浸透している（同親：8地点、目下：11地点）。ただし、一部では「呼びかけ」の「オー」「オッス」「ウィッス」などが行われる。動作に関しては、これらの相手には「手を振るなど」(☺)が主流である。高年層では親しい同年代に対して様々な表現を用いていたが、若年層では表現数も少なく、「オハヨー」常体などの定型的なあいさつ言葉で済ませるようである。また、高年層では、親しい同年代や目下に、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を交わす表現が見られたが、若年層においてはそういった表現も影をひそめ、定型的なあいさつ表現の交換に終始するようである。

5.3 未知の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

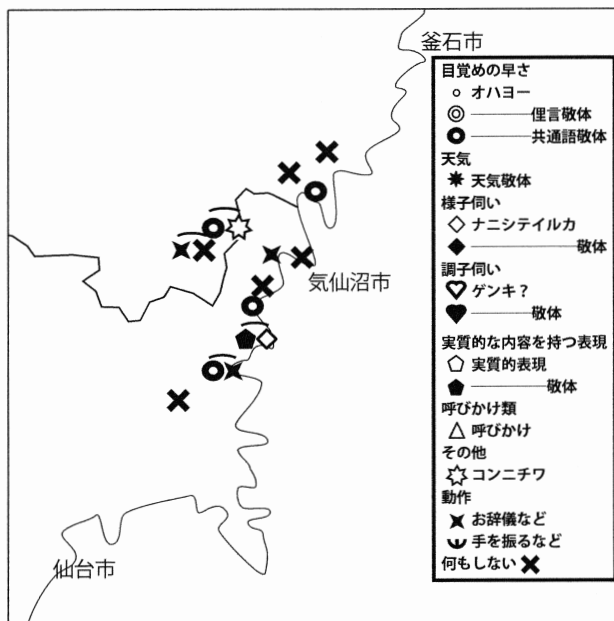


図 10. 未知の相手に対するあいさつ表現の分布

図 10 は、南三陸地方の若年層話者が、朝、未知の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

「何もしない」、「オハヨー」共通語敬体、あるいは「会釈」程度で対応していることがわかる。非定型表現を回答した歌津についても“（疑いつつ）「ツリコスカ（釣りですか）」”、“（疑いつつ）「ナニシテルノ」というものであり、未知の相手に対して決して好意的に声をかけるというわけではないということがわかる。

5.4 南三陸地方若年層のあいさつ表現の使用パターン

以上明らかにしてきた分布の特徴から若年層の使用実態については、以下のようにまとめられる。

表 2. 南三陸地方・若年層のあいさつ表現の使い分け

	主なバリエーション
最も目上	オハヨー共通語敬体、お辞儀
やや目上	
顔見知り程度の同年代	
親しい同年代	オハヨー常体、呼びかけ類、手を振るなど
目下のもの	
未知の相手	オハヨー共通語敬体、お辞儀など、何もしない

若年層は、ほぼ「オハヨー」類の使い分けに移行していると分析できる。高年層とは異なり、同年代の親しい相手にすら、「オハヨー」常体が浸透している。また、使い分けに関しても、大きく「オハヨー」共通語の表現に、敬体を付けるかそれとも常体で接するかといった、極めて単純な 2 段階程度の認識になっていることが窺える。高年層に比べ、調子伺いや実質的内容を持つ表現などの分布が少ないが、これらはそのやりとりを通して、後続する会話への展開を持ち得る表現と捉えられ、そういった表現が少ないという点に、声かけが簡素だということが読み取れる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、待遇的観点からのあいさつ表現の記述の一事例として、南三陸地方のあいさつ表現の使用実態を明らかにすることを目的としてきた。

高年層、若年層それぞれに各待遇的場面の使用実態を洗い出し、その特徴を記述した。高年層に関しては、以下のように使用実態の特徴をまとめることができる。

- ・最も目上の相手に対しては「オハヨー」俚言敬体が顕著に用いられる。
- ・やや目上の相手に対しては「オハヨー」共通語敬体が用いられる。
- ・同年代の親しい相手には「オハヨー」類よりも調子伺いの表現、実質的内容から始まる表現、呼びかけ類が盛んに行われている。

特に注目すべき点は、同年代の親しい相手に対して、定型的な表現である「オハヨー」類を用いない地域の多さである。そういった地域では、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように、実質的な内容を交わすことが多いということである。つまり、南三陸地方の高年層については、「オハヨー」類だけで地域の声かけが充足しているわけではないことが明らかになったと言える。

一方、同地方の若年層のあいさつの使用実態の検討からは、次のような使い分けの特徴を得た。

- ・最も目上、やや目上、顔見知り程度の知人に対しては、すべて「オハヨー」共通語敬体、ないしお辞儀という、共通のパターンが用いられる。
- ・同年代の親しい相手、目下のものには「オハヨー」常体、呼びかけ類、手を振るなど、共通のパターンが用いられる。

このように南三陸地方の若年層については「オハヨー」類の常体・敬体の使い分けでほぼ地域の声かけが充足している、との見込みが得られた。また、副次的に明らかになった、使用実態の年代差から窺える変化の動態について述べると、南三陸地方では、若年層の方が「オハヨー」という表現内容への一極化が進んでいると言え、その意味で、定型化が進行していると捉えてよいと思われる。あいさつ表現の待遇的使い分けに関しても、高年層が保持していた、最も目上に対して顕著に用いられるような「オハヨーゴザリス」などの俚言形に代わる表現は見られない。

この年代差の傾向は、筆者のこれまでの研究に照らし合わせると、興味深い結果と言える。筆者のこれまでの研究で、少なくとも近年のあいさつ表現の変化には、同一表現を多場面に渡って汎用的に用いるような志向性の変化と、待遇的使い分けの意識に応じて、場面に応じた適切な表現を用いるような志向性の変化が観察されたからである(中西 2011a)。例えば、共通語では、近年の若者のあいさつ表現において、待遇的使い分けの側面を重視して変化する事例が窺える(中西 2008b)。そういったあいさつ表現変化の動向を受け、当該地域のあいさつ表現の使用実態を省みると、南三陸地方の気仙沼市周辺の地域は、高年層から若年層にかけて、前者の志向性の変化を遂げていると推測される。このような変化の志向性から位置づけられる地域の特徴もあいさつ表現研究にとって重要な視点と言える。

最後に今後の展望と課題について述べる。

本稿での考察により、一見「オハヨー」類で地域のあいさつが充足しているように窺われる地域でも、待遇的場面の差ごとに使用実態を見れば、必ずしも「オハヨー」類などの定型的な表現だけ

で地域の声かけが充足しているわけではないということが提言された。この傾向は、当然他地域にも当てはまる可能性がある。つまり、使用実態の記述が十分でない非定型表現使用地域の記述に加えて、南三陸地方以外の他の定形的表現使用地域でも、待遇的場面の差ごとに、その地域の使用実態を記述する必要があることを示唆している。

また、本稿では、世代差については、高年層・若年層という2世代による大きな括りでの使用実態の差を把握するにとどまった。しかし、自然な運用に利する待遇的場面の差ごとの記述資料の完成を目指すという意味では、より詳細な使用実態の世代差を把握することが求められる。よって、本稿で得られたような世代ごとの使用実態の差があることを踏まえて、どれくらいの世代から、「オハヨー」類のような定型的表現による使い分けに移行していると言えるのか、その点について記述・検討を行うことも今後求められる。

文 献

- 大橋純一(1997)「宮城県宮城郡利府町森郷方言の待遇表現」方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊第7巻 方言の待遇表現』,広島大学教育学部
- 国立国語研究所(2006)『方言文法全国地図第6集』,国立印刷局
- 齋藤孝滋・森節子・工藤香寿美(2001)『方言資料叢刊』を用いた全国挨拶行動の言語行動学的・方言学的研究『玉藻』37,フェリス女学院大学国文学会
- 真田信治(1981)「あいさつ言葉の地域差」文化庁編『ことばシリーズ14 あいさつと言葉』,大蔵省印刷局
- 瀧川美穂(1998)「待遇表現」加藤正信・遠藤仁編『宮城県中新田町方言の研究』,東北大学国語学研究室
- 徳川宗賢(1978)『日本人の方言』,筑摩書房
- 中西太郎(2005)「出会いの言語行動と親疎意識」『言語科学論集』9,東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 中西太郎(2007)「あいさつ表現における待遇関係把握—社会的属性差の観点から」『言語科学論集』11,東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 中西太郎(2008a)「あいさつ言葉の定型化をめぐる—「おはよう」を事例とした定型化の検証」『国語学研究』47,「国語学研究」刊行会
- 中西太郎(2008b)「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握『社会言語科学』11-1,社会言語科学会
- 中西太郎(2009)「東北地方のあいさつ表現の分布形成過程—朝の出会い時の表現を中心に—」『東北文化研究室紀要』51,東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 中西太郎(2011a)『待遇的観点から見た日本語あいさつ表現の研究』,東北大学大学院文学研究科博士學位論文

- 中西太郎(2011b)「朝のあいさつ表現の変遷—南九州地方の非定型表現使用地域に注目して—」『国語学研究』50,「国語学研究」刊行会
- 中西太郎(2011c)「あいさつ表現」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』,東北大学国語学研究室
- 中西太郎(2011d)「「あいさつ表現の使用実態の地域差—朝の出会い時を中心に—」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集 第93回』,日本方言研究会
- 中西太郎(2011e)「待遇的観点から見たあいさつ表現の使用実態の地域差—青森県・秋田県の朝の出会いの場面を対象に—」『文化』75・1・2,東北大学文学会
- 中西太郎・田附敏尚・内間早俊(2009)「秋田県の言語調査報告」『東北文化研究室紀要』50,東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 藤原与一(1992)『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究第三巻あいさつことばの世界』,武蔵野書院
- 本堂寛(1997)「岩手県盛岡市方言の待遇表現」方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊第7巻 方言の待遇表現』,広島大学教育学部
- 三井はるみ(2007)「おはようございます、こんばんは」『月刊言語』35・12,大修館書店
- 柳田国男(1946)『毎日の言葉』,創元社

付 記 言語地図作成にあたっては、国立国語研究所による言語地図作成プログラム（プラグイン）を利用した。